寒冷地形談話会通信

1994年度　第１号　　1994.05.26発行

事務局：〒113　東京都文京区本郷７丁目３－１
東京大学大学院理学系研究科地理学教室内
寒冷地形談話会事務局（担当，青木）
TEL. 03-3812-2111（EXT.4580）
FAX. 03-5684-0518（地理学の事務室）
e-mail. kent@geogr00.geogr.s.u-toyko.ac.jp

・事務局移管のお知らせ

昨年度まで事務局を努めていただいた東京学芸大学に変わり、本年度から寒冷地形談話会の事務局が東京大学大学院地理学教室へ移管いたしました。主に青木賢人（Ｍ２）が担当させていただきます。昨年までの事務局のＳ氏のようなバイタリティーを持って、会の運営にあたっていきたいと思っています。今後ともよろしくお願いいたします。

なお、事務局への連絡は、題名の下に書きました住所，電話番号，FAX，e-mailなどをお使いの上、お願いいたします（できるだけ、お葉書でいただければ幸いです）。

・６月例会のお知らせ

５月の例会は事務局の都合で取りやめになりました。すみません。今年度第１回例会を６月18日（土曜日），15:00から明治大学において行います。教室は当日に明治大学大学院棟に掲示しておきます。発表者、演題は以下の通りです。

「熱帯高山・アンデス特集」

長谷川裕彦氏（明治大・院）　「アコンカグア山周辺の氷河地形」
水野一晴氏（都立大・院）　「熱帯高山のお話」

皆様，振るってご参加ください

・会費納入のお願い

年度が改まりましたので、今年度の会費納入をお願いいたします。郵便局の振り込みでできます。郵便料金の値上げなど、支出の増加も予想されますが、幾分繰越金もありますので、今年度はとりあえず会費は据え置きます。

寒冷地形談話会　東京０－１７１３４２　　1,500円／年　です

昨年度の収支決算に付きましては、次号の会報に掲載する予定です。遅れて申し訳ありません。

また、名簿の作成を行うため、振込用紙にお名前と所属，会報発送先の郵便番号，住所，機関名，電話番号（内線番号を含む）を会報が届きますように正確にご記入のうえ、６月中にはお振り込みくださるようにお願いいたします。また、メイルアドレスをお持ちの方は、それもご記入いただければ幸いです。

（例）　青木賢人（東京大・院）　〒113　文京区本郷7-3-1
東京大学大学院理学系研究科地理学専攻
tel.　03-3812-2111(ext.4580)
e-mail. kent@geogr00.geogr.s.u-toyko.ac.jp

・投稿のお願い

昨年度より始まりました「山岳研究気象台」ですが、ご好評をいただいていますので、本年度も引き続き行っていきたいと思っています（今号は都立大の高岡さんにお願いしました）。これまでは、事務局の方からお願いして書いていただいていましたが、「こんなことを書いてみたい」ということがありましたら、ぜひ、ご投稿ください。事務局へのご批判やご希望でも結構ですので、会員の交流を活発にするためにも、どしどしお寄せください。お待ちしています。

また、「例会でこんな話が聞きたい」というようなご要望や、巡検のお知らせなどの情報がありましたら、併せてお知らせください。

例会会場が張り出されているところ：明治大学大学院棟入り口

ＪＲお茶の水駅新宿よりの改札を出て、前の太い道の坂を向かって左側に下ってください。数分歩いたところの右手のビル（明治大学の最初のビルです－－ジローの隣）が大学院棟です。入り口に例会を行う会場を張り出しておきます。

山岳研究気象台 3

“山岳研究気象台”は、山の研究に関する展望、評論、随筆などをつれづれなるままに書いていただくコーナーです。

求む、植生仲間

高岡貞夫（都立大理学部）

＜この小文は、これから卒論に取り組もうとする若い人に向けて書いたものです＞

なぜ研究をやったり論文を書いたりするのかと問われたときに、「○○を明らかにして□□分野の研究を前進させるため」といったレベルから、「自分を理解するため」といったレベルまで、様々な答え方があるのでしょうが、地理屋の場合、「野山を歩くときの喜びを深めるため」というレベルがどこかにあって、特に野外に拠点を置くタイプの人たちの「地理学に首をつっこんだ動機」あるいは「地理学をあきらめないでいる理由」のひとつになっているのではないでしょうか．で、もしそうであるなら、野山を歩いていてはじめに目にはいるはずの山の形（地形）とそれをおおう植物（植生）が、日本でも同じ程度に地理屋によって研究されていても良かったはずです．

それがそうなっていない理由はおくとして、このことは地理学が植生に関して取り組む課題に乏しいということを意味するのではもちろんありません．実際、「これ、ほんとは地理がやるような研究だよなあ」と思うような論文が、生態学や林学などの人たちによって書かれています．例えば梶さんや杉田さんによる偽高山帯成立の問題（梶，1982；杉田，1990）、中越さんのグループによる社会構造変化と植生景観の関係の検討（鎌田・中越，1990）、中村さんによる森林と地形の相互作用の研究（中村，1992）、沖津さんによる植生垂直分布帯論（沖津，1984）、小椋さんの絵図・旧版地形図を用いた植生復元（小椋，1992）……などなど．しかも、これらのうちのいくつかは、内容だけでなく手法的にも（！）地理学が最も得意とするやり方で、行われているのです．

さて、地理屋が植生研究に取り組むときに、どんなふうに植生を扱えばよいかというと、これはやはり、小泉さんの言うとおり地生態学的なスタイルが一番良いのでしょう．これについては小泉さんの論文(小泉，1993)を見てもらうことにして、ここでは、もう一つのスタイルについてふれます．

それは、空中写真を利用して地域全体の植生をながめるような研究、しかも生態学で流行している「攪乱」の概念を意識した成因論的研究です。生態屋さんは、小面積の方形区内の調査はとても詳しくやるのですが、方形区を設けた場所の空間的な位置づけがあやふやなまま研究が進められている場合があります．また、「大面積プロット」と呼ばれる大型のものもありますが、それもせいぜい数ha～数十ha程度の面積です（1/2.5万地形図で1haがどれぐらいの広がりを持つか確認するとよい）．このようなプロットでは「A群落の維持機構」、「B群落の動態」といった研究はできますが、A、B、C･･･の各群落の水平的配列様式やそれを決める要因、配列様式自体の空間変化等については十分に議論できません．いろいろな時空間スケールの自然的・人為的攪乱作用によっ

て重層的に決定される植生の分布構造を理解するには、生態屋さんのように狭い範囲を詳しくみるだけでなく、大ざっぱでもいいから広い範囲を見渡すことも必要でしょう．そして、これら両者の見方は ―― 例えば同じ高山植生を研究する場合にも様々な視点や方法があってよいのと同様に ―― どちらが優れているとか後退しているとかの関係にあるのではなく、相互に補完しあう関係にあるものです．

小泉さんが勧める垂直的アプローチ（地質・地形・土壌・植生間の関連の複合的把握）と、上述したような水平的アプローチ（地域内の不均一構造の把握）は、話を単純化するために別々のスタイルとして書きましたが、もともとTrollが、*Landscape ecology* (*Geoecology*)の手法としてワンセットで提唱したものです．ここで、「なんだ、Troll 以来何も進歩がないじゃないか」などと、どうぞ言わないで、こういったやりかたで自然を見ていくことが、没面積的、没次元的（牧田，1991）でない、地理の良さを生かした魅力ある植生研究につながるのではないでしょうか．

さて、求人広告のコピーのようなこの小文の表題は、都立大の院生だった磯谷さん（現・国際生態学センター）が10年前の全地院連名簿にのせていた言葉です．院生はもちろん卒論生でも、植生を地理の研究対象の中心に据えようと考える人が少なかった当時の雰囲気がユーモアまじえて表現されています．けれども、大学院にまで‘植生仲間’が増えてきた今では、「一人でも漕ぎ出す」といった大げさな覚悟はもはや無用で、気軽に仲間に加わってほしいと思います（植生だけで仲間を作ってかたまるという意味ではありません、念のため）．ここ数年「没次元性」に気づき始めた生態屋さんが急増している感がありますので、始めるのならば今のうちです．

（文中、先生や先輩、直接面識のない方まで、すべて、さんづけで呼ばせていただいた失礼をおわびいたします．また、紙面の都合上、文献の引用は最小限にさせていただいた。）

引用文献

沖津　進(1984)：ハイマツ群落の生態と日本の高山帯の位置づけ．地理評，57，791-802．

小椋純一(1992)：『絵図から読み解く人と景観の歴史』 雄山閣，238p．

小泉武栄(1993)：「自然」の学としての地生態学－自然地理学の一つのあり方－　地理評，66，778-797．

梶　幹男(1982)：亜高山性針葉樹の生態地理学的研究－オオシラビソの分布パターンと温暖期気候の影響－　東大演林報，72，31-120．

鎌田磨人・中越信和(1990)：農村周辺の1960年代以降における二次植生の分布構造とその変遷．日本生態学会誌，40，137-150．

杉田久志(1990)：オオシラビソ林の分布と発達史－針葉樹林欠如の成因－　遺伝，44，49-52．

牧田　肇(1991)：生態学の視点を地理学はどうとらえるべきか．地理，36(3)，26-32．

中村太士(1992)：流域レベルにおける森林撹乱の波及－森林動態論における流域的視点の重要性－　生物科学，44，128-140．